

村上春樹著「遠い太鼓」講談社 1990年6月25日刊を読む(1)

## 走ること

1. 南ヨーロッパの中でもいちばん走りにくい町、これはなんといってもローマである。走る場所がないというのではない。走る場所はちゃんとある。たとえばボルゲーゼ公園なんて、走るにはすごく良いコースだ。広々としているし、景色も良い。テヴェレ河沿いの道もなかなか悪くない。問題はそこにたどりつくまでである。そこにたどりつくまでがちょっとした地獄なのだ。なにしろ歩道という歩道は駐車中の車で塞がれているし、町じゅう犬の糞だらけ、車はびゅんびゅんスピードを出している、空気は悪い、人間は多いときているから、公園につく前にもうへとへとになってしまふこと請け合いである。セントラル・パークにたどりつくまでのニューヨークの町も相当だと思ったけれど、ローマのカオスに比べたらあんな上品なものである。
2. もうひとつローマで走っていてうんざりするの、町をごろごろしているティーン・エイジャーのタチが悪いこと。タチが悪いといってもブロンクスの高校生みたいにヘロインやって飛び出しナイフを振りまわして というような腰のすわった悪さではない。ただもうやたらちゃらちゃらとうるさいのである。そして徹底的にスポイルされている。性的にも早熟で、新聞の調査によるとほとんどのガキは15歳で初体験をすませているということである。そういうことにだけは熱心なのだ。イタリアの学校のシステムがどうなっているのかは知らないけれど、ナップサックを肩にかついだ高校生だの中学生だのが真っ昼間からそのへんで暇そうにごろごろしていて、煙草を吸ったり、恋人同士でいちゃいちゃしたりしている。何しろ時間と元気はいっぱいあって金がないという連中だから、その前を僕が通りかかると、暇潰しにいいカモが来たとはばかりにぎゃあぎゃああとわめきまわる。そのうるささ・しつこさといったら、ちょっとない。
3. 「おい日本人、もっと早く走れよお！」  
「おい日本人、走ってないでカンフーやれ、カンフー！」  
「いち、にい、さん、しい」  
なんてことをみんながくちぐちにわめきまわる。一緒に走る真似をする奴もいれば、しつこくカンフーの真似をする奴もいれば、ただただぴょんぴょんと跳ねるのもいる。その昔ターザン映画に出てきた躰の悪い猿とかわりがない。悪意がないことはわかるからそれほど腹はたたないけれど、それにしてもうるさくて煩わしい。『ロッキー』のテーマを合唱する奴らまでいる。日本の高校生はそういう馬鹿なことはまずしない。僕は日本の中高校生を見るたびに、受験やら規則やら部活やらヒステリックな教師やらにぎゅうぎゅう締め付けられて気の毒だと思うし、できることならそんな消耗的状况から解放してあげたいと思っている人間だが、そんな僕でさえイタリアのガキをみているを首ねっこを掴んで「おまえらいつまでもくだらないことやってないで、ちゃんと学校に行って勉強してろ。ちょっとは世の中のことも考える」と言いたくなってくる。
4. しかしこんなやつらにいちいち関わり合うのも情けなく馬鹿馬鹿しいから、聞こえないふりをしてさっさと前を走り過ぎる。

5 . ローマというのははっきり言って巨大な田舎町みたいなところである。都市としての情報量をとってみれば、ニューヨークや東京にくらべて(いや、ミラノにくらべても)圧倒的にちいさいし、遅れている。でもそのぶんローマの子供たちはいきいきして、生気に溢れているように感じられる。がらの悪いガキにはしばしば苛々させられはするけれど(2、3人絞め殺してやろうかと思うことだってある)、それでも彼らの目は、竹下通りを歩いている子供たちの平均的な目に比べると動きが敏捷で輝きがあるように僕には感じられる。映画に例えるとカット割りがさっさと速くて的確なのだ。何かを一生懸命見ているという感じがある。それに比べると東京の平均的な子供たちの目は「だからあ、それでええ」式にもったりしているか、あるいはもっと神経症的にリモコンでテレビのチャンネルをばたばた切り換えるみたいにせわしないかのどちらかであるようだ。彼らは都市の情報量に追いつけないか、あるいは追いつこうと必死の努力をしているかである。その真ん中というのがあまり見受けられない。少なくとも僕にはそう感じられる。その点、ローマの悪ガキどもはまあ楽なものである。追いつかなくてはならないようなものはほとんどないし、しかも面白いことはけっこう沢山あるのだから。そのへんの広場に寝転んで通りをいく人にむかって「おーい、おっさん、元気かあ？」なんて言ってりゃいいのだから。

6 . 旅に出て、その町を走るのは楽しい。時速 10 キロ前後というのは風景を見るには理想的な速度だろうと僕は思う。車では速すぎて小さな物を見落とししたり、ちょっとした匂いや物音を逃がしてしまったりする。歩きではいささか時間がかかりすぎる。それぞれの町にはそれぞれの空気があり、それぞれの走り心地がある。いろんな人がいろんな反応をする。道の曲がり具合、足音の響き方、歩道の幅、ゴミの出し方、それぞれに全部違う。ほんとうに面白いくらい違うのだ。僕はそういう町の表情を眺めながらのんびりと走るのが好きなのだ。フル・マラソンを走るのも面白いけれど、こういうのも悪くない。僕も生きているし、みんなも生きているんだという実感がある。そういう実感というのは、往々にして見失われがちなのだ。

7 . ある種の人々が知らない土地にいくと必ず大衆酒場に行くように、またある種の人々が知らない土地に行くto必ず女と寝るように、僕は知らない土地に行くto必ず走る。走ることで僕にしか感じられないことを感じようとする。そういうのが上手くいくこともあり、いかないこともある。でもまあ走る。なにとはともあれ走ることは好きだし、知らない土地を走るのはとても心優しいことなのだ。まるで買ったばかりのノートの1ページめを開いたときのように。

P200 ~ 203

#### [ コメント ]

村上春樹氏の走りながら見る景色。これもさわやかな文体の原風景の一つなのかもしれない。それにしてもうまい文章だ。

- 2012年3月27日 林 明夫記 -